

播磨科学公園都市のあり方検討 第2回イノベーションチーム会議

■日 時：2026年8月12日（水）15時30分～17時00分

■場 所：光都プラザ cotohana（会議室）、Web

■参加者：16名（有識者：3人、行政職員12人）

■要点：

1. テクノの特性を生かした実証実験の展開

- ・大規模な実証だけでなく、住民モニターなど地域住民の生活に身近な小規模な実証を積み重ねることや、移動、子どもの科学教育など、地域課題と直接結び付くテーマを設定することが考えられる。（行政職員）
- ・ドローンや自動運転等の実証は他地域でも進んでいるため、後発で取り組む場合には、道路環境や移動ニーズ、研究施設との近接性など、「光都だからできる」理由を明確にし、地域特性と実証テーマをセットで示す必要がある。（行政職員・有識者）
- ・ドローンについては、単なる資格取得や操縦訓練ではなく、開発企業や研究機関と連携し、新たな機体・技術の研究開発等と一体となったテストフィールドとして展開することが重要である。（有識者）

2. SPring-8等の研究資源と企業・地域をつなぐ仕組み

- ・SPring-8は国が整備した施設であるため、自治体が利用枠を確保する仕組みをそのまま適用できるわけではないが、自治体が一定の支援を行うことで地域企業等による利用促進の余地がある（有識者）
- ・大型研究施設を地域企業が利用するためには、研究成果や設備と企業をつなぎ、具体的な利用を支援できる中間的・サポート的な人材の育成が不可欠である。（有識者）
- ・SPring-8等を実際に利用している企業についても、地域産業クラスターの核や連携対象として捉えられる可能性があり、立地企業だけでなく研究施設利用企業まで視野を広げて検討する余地がある。（行政職員）

3. 産業クラスターは広域的な視点で検討する必要性

- ・播磨科学公園都市単独では、特定分野の産業集積や生産機能が十分に強いとはいえないため、西播磨全体、さらには兵庫県全体として産業クラスターを構想し、その中でテクノの役割を位置付ける必要がある。（行政職員・有識者）
- ・既存産業の集積だけにとらわれず、バイオ、生活関連、フードテック等の新たな分野や、地域の食文化・地場産業と研究機能を結び付ける方向性も考えられる。（有識者）
- ・産業クラスターについては、本チーム会議だけで完結するテーマではなく、県庁や地元自治体等を含む、より上位のレベルでも戦略的に検討する必要がある。（有識者）

4. 持続的なイノベーションを支える体制・人材づくり

- ・個別の実証実験で終わらせず、継続的な地域づくりにつなげるためには、エリアマネジメント型の組織や、都市計画・地域開発の専門家等を含む継続的な運営体制が必要である。（有識者）

- ・人材面では、トップ研究者だけでなく、研究や社会実装を支える中間的・サポート的な人材を育成することが重要であり、既存大学での学部・コース設置、高専や専門学校等も含めた人材育成の方法が考えられる。(有識者)
- ・起業や事業化を進めるためには、技術分野だけでなく、金融、法律、特許等の専門サービスとの連携も必要であり、たつの市や姫路市等の周辺都市が持つ都市機能との連携を強化する必要がある。(有識者)
- ・産学官連携については、技術開発だけでなく、生活の場そのものをフィールドとして大学・企業・住民が関わることも重要な視点である。(有識者)

5. 研究者・学生と地域との接点づくり

- ・持続的なイノベーションを生み出すためには、研究開発環境だけでなく、研究者が「ここに来ると心地よい」「滞在していて楽しい」と感じられる生活・滞在環境も重要である。(有識者)
- ・研究者の滞在時には、地域の食やまちのイメージを結び付けることが地域を印象付けるうえで重要であり、宿泊施設だけでなく食事を含めた滞在環境の充実が必要である。(行政職員・有識者)
- ・テクノでは進出企業の従業者や学生が昼間人口の大きな割合を占めていることから、観光客を呼び込むことだけでなく、企業や学生との連携を強め、研究施設とまちとの接点をつくることがテクノらしいまちづくりにつながるとの意見があった。(行政職員)
- ・県立大学の学生についても、学生自身の知識や関心を入口として地域活動やイベントに関わってもらうことや、播磨科学公園都市をフィールドワークの対象地域として活用することが考えられるとされた。(行政職員・有識者)

6. まちびらき 30 周年を契機としたテクノの再発信

- ・まちびらき 30 周年を単なる周年行事ではなく、「ここから新しいテクノポリスが始まる」という再起動の機会として捉え、若い研究者や子どもたちが未来を感じられるまちの姿を示すことが重要である。(有識者)
- ・アニメ「LONA」については、一過性の PR に終わらせず、地域の名物・名所、SPring-8 等の研究施設と結び付け、継続的な地域 PR や来訪のきっかけとして活用することが重要である。(行政職員)
- ・アニメを活用する場合にも、アニメそのものを目的とするのではなく、研究室を作品内に再現するなど、研究都市ならではの特徴や地域の魅力を伝える手段として活用することが重要である。(有識者)

7. 研究機能と地域資源を結び付けた価値創出

- ・SPring-8 と地域の食・地場産業を結び付け、研究成果を地域の商品や産業の付加価値向上につなげることが、地域 PR や新たな産業展開につながる可能性があり、たつの市、上郡町、佐用町等の地域産品・地場産業と研究機能を組み合わせ、新しい価値を生み出す取組が考えられる(行政職員・有識者)
- ・新たな事業者をすべて外部から誘致するのではなく、佐用町のドローン事業者等、近隣市町に既に存在する企業・人材・取組を起点として、広域的な連携を図ることも重要である。(行政職員)

8. 今後の検討の進め方

- ・第3回以降は、今回挙げたアイデアをより具体化し、実際にどのような活動・取組として展開できるのかを深掘りしていく方向性で進めたい。(行政職員)

以上。